

仏法を聞く  
ご縁が広がる

# 寺院活性化の 現場レポート

しんらん交流館 内  
真宗教化センター  
「寺院活性化支援室」  
電話 075-371-9208  
メール kikaku@higashihonganji.or.jp

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃  
法要に向けて、「1つの寺、1人の人を大切に」宗門  
の施策として、「寺院活性化支援」があります。  
お寺の環境は千差万別です。寺院活性化支援では、そ  
のお寺らしさを、生活する寺族や門徒、地域の人たちが  
一緒に再発見して、共に一歩を踏み出すお手伝いをして  
います。

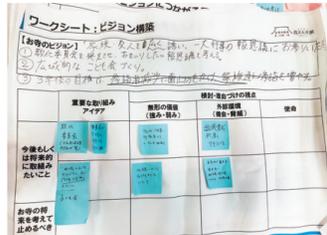
## 大垣教区第十一組徳法寺の場合

### 「報恩講…やる？やらない？」

全国各地の寺院で動まる  
報恩講。しかし昨年、新  
型コロナウイルス感染症の  
感染拡大に伴い、可否を  
めぐって数多くの話し合い  
場が持たれてきた。  
親戚寺院を誘って「元  
気なお寺づくり講座」(二  
〇一九年開催)を受講し  
た大垣教区第十一組徳法  
寺も例に漏れず、二〇二  
〇年の報恩講の可否を  
めぐって役員会で意見  
が分かれたそうだ。  
講座に徳法寺門徒とし  
て参加し、役員会にも同  
席していた責任役員の小  
林展雄(たけのぶ)さんは、「講座で  
策定した計画は、報恩講  
を中心に、そこへさまざま  
な取り組みを集中させ  
ていく方向性だった。二  
〇二〇年の報恩講は、コ  
ロナの影響下であって、  
組内でもどうしようかと  
悩んでいる声を聞いたた  
とふりかえった。  
結果として徳法寺では、  
報恩講を断ることが決  
定し、以降役員会を通じ  
て感染対策について議論  
を重ね、無事に報恩講を  
お断りすることができた。  
講座を通して見えた徳  
法寺の強みは、先代の頃  
策定された本堂修復事業  
を契機として、今も寺院  
を支える基盤となってい  
る門徒組織の力があり、  
その力が役員会という形  
となって活かされ、この  
問いに向き合っていく原  
動力となったのではない  
だろうか。  
「私は難しいことはよ  
くわからないけれど、講  
座に参加したことで、普  
段のお付き合いよりも、一  
歩深くお寺に踏み込む  
ことができたと感じてい  
る」と、にごやかに語っ  
てくれたの  
は、小林さ  
ら同様、講  
座に参加し  
た結心の会  
員(徳法寺の  
女性門徒の  
会)会員の  
藤嶋和代さ  
ら。住職の桐  
山千妃さん  
も、「小林さん  
と藤嶋さん  
に声をかけてよ  
かった」とうれし  
そうに話  
した。「実は、普  
段から深く関  
わってもちろ  
ん、門徒さん  
は、今後、今  
の徳法寺に  
関わってら  
しい」と思  
った門徒さん  
に参加を願  
いした。こ  
れまで深く関  
わっていな  
い人にも伝  
わる表現を  
するのにな  
らなくてよ  
かったと、受  
け手の視  
点を大切に  
されている  
ことがうれ  
しい。



左から 桐山住職・藤嶋さん・小林さん



当時のワークシート：徳法寺のビジョン

「策定した事業計画は、コロナの影響もあり、一部手をつけることができていないこともあるけれど、学んだ経験を活かしてコロナ収束後に再出発をはかりたい」と語った桐山住職の声色は、多くの門徒さんに元気づけられ、未来に向けて新たな一歩を踏み出そうとする力強さを纏っている。

## 九州教区熊本東組長蓮寺の場合 「正直、これは困ったぞ」



長蓮寺住職と講座に参加したご門徒

の住職からの誘いのため、仕方なく参加したというのが本音だった。平日夜の開催とあって、山林業との調整をやりくりしながら参加。各回の講義・ワークショップ



山林組合に勤める川谷住職

「正直、これは困ったぞ。寺院の住職をする傍ら、森林組合に勤めている長蓮寺の川谷(がや)住職は、熊本教区第九組(くまもと)の参加を誘われた時、率直に思った。この講座は全5回、月に1回程度のペースで、コンスタントに開催することから、山林業が多忙な時期であることがわかってきたために、困惑しつつも、いつもお世話になっている同じプロック

一本であるべきなんて言われたこともありました。でも、今はこういうお寺の生活も面白いと思うこともあって、人のつながりの豊かさを感じています。決して多くないご門徒と共に、大きなことはできないけれど、小回りは利くお寺なので」と語る。



三折本尊の台座「うてな」

## 原風景は地域と共にある別院 (井波別院瑞泉寺) 「お寺とまちをつなぐ「テラまちコネクト」



テラまち雑貨店から別院山門を指さす子どもたち

失を経た瑞泉寺再建。寺を荘厳する彫刻を担うため、本山から御用彫刻師が派遣され、そこに井波の宮大工が弟子入りしたことがはじまる。故郷に、そこに暮らす人々の瑞泉寺に対する思いには特別なものがある。「子育て中のお母さん」に参画してもらったことで、今日まで伝わってきた井波の歴史や魅力を次世代に伝えるべく、また、公益財団法人「南



山門前に完成した「テラまち雑貨店」

ち雑貨店」として改装、子育て中のお母さんが動きながら井波を学ぶ活動拠点にするなど、今後の展開を準備している。建物の改修には、海外からの観光客に人気の宿泊施設をプロデュースする地元建築家の協力を得るとともに、地域の方々もそれに加わった。そして、作業を手伝った地元の子供たちが再び寺を訪れ、「僕たちが塗ったところやよ」と祖父母に教える温かな光景も見られる。



「物語のあるおみやげ」とテラまちコネクトのメンバー

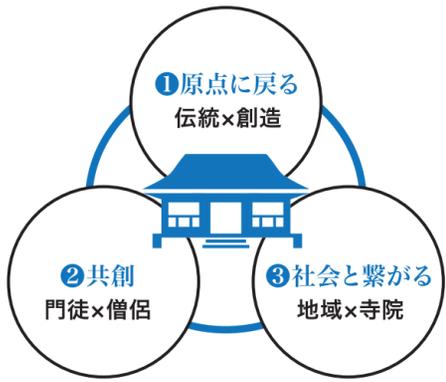


瑞泉寺の歴史を描いた絵本「井波瑞泉寺ものがたり」

## 寺院活性化支援室の活動

寺院活性化支援室の活動は3つの視点を大切にしています。

- ① 原点に戻る  
原点に戻るとは、お寺の本来性に立ち返るということです。寺院が建立され、今日まで護持されてきた営みには「願い」があり、そこに伝統の本質があります。そして、変化し、多様化し続ける時代に合わせた新たな表現の創造を考えます。
- ② 共創  
お寺は教えを大切に聞く人々によって相続されてきました。そこには、教えを語る者と聞く者という区別ではなく、共に聞き開いていくところに真宗寺院の特徴があります。これからのお寺の活動を考えるときにも、門徒も僧侶も「共」に「創」造することを大切にしています。
- ③ 社会と繋がる  
お寺は単独で存在しているのではなく、地域の人々の生活に密着して存立しています。地域や社会との接点の中に、お寺の中だけでは見えにくい外からの視点でお寺の社会的意義を確かめます。



これらの3つの視点をもとに、真宗寺院の願いが具現化され続けていくため、寺院活性化支援室では、そのお寺ならではの独自性と主体性を大切に、ワークショップの手法を用いながらお寺の教化活動をサポートします。

## 寺院活性化支援室に関する発行物

寺院活性化支援室、元気なお寺づくり講座のパンフレットはしんらん交流館ホームページ(浄土真宗ドットインフォ)よりPDFデータがダウンロードできます。ぜひ、ご活用ください。



しんらん交流館  
ホームページ内の  
パンフレット  
ダウンロードページは  
コチラから↓



## 統計情報を活用しよう

時代状況が目まぐるしく変化する中において、様々な統計データから客観的にお寺を取り巻く現状を把握することがとても大切です。真宗教化センター寺院活性化支援室では、皆さんのお寺の今後の状況を考えていただく上で、活用できる統計データをまとめておりますので、ぜひご活用ください。



- ・「新型コロナウイルス感染症の影響下における寺院の教化活動の工夫に関する調査」(2020年真宗教化センター寺院活性化支援室)
- ・「寺院活動における青少年教化活動の実態調査」(2021年九州教区/2018年山陽教区)
- ・第7回「教勢調査」報告書(2012年)
- ・「仏教に関する実態把握調査」(2021年全日本仏教会)
- ・「浄土真宗に関する実態把握調査」(2017・2018年真宗教団連合)など

しんらん交流館ホームページ(浄土真宗ドットインフォ)で

お寺の活動事例やお役立ち情報を  
発信しています!



# 宗門内外の環境変化から

2012年に行われた「第7回教勢調査」(※①)では、少子高齢化、価値観の多様化などの周辺環境の変化をはじめ、法要行事への参加者減、転居門徒との無縁化といった「教勢の減少」が露わとなりました。

一方、その厳しい情勢の中にあっても、持続性をもって教化に取り組んでいるお寺の特徴も浮かび上がってきました。

それは、規模の大小や都市部・過疎地などの区別なく、同朋の会や聞法会などによって、僧侶と門徒が「双方向のコミュニケーションを定期的に持つ」ことができているという点です。

このことから「お寺における僧侶・門徒間での問題意識や課題共有の大切さ」が、今後のキーワードとして捉えられました。

# —これからのお寺のあり方—

2013年に開催された「中央同朋会議」(※②)では、お寺のあり方について意見が交わされました。

反省的に語られたこととして、これまでの「待つ教化」だけではなげ、お寺が地域へ「出向く」ことが大切であり、その関係性の中で、「お寺が地域に「なくてはならない」存在になれるかどうか。」つまり、「お寺の存在意義や使命を明確にし可視化する」ことができるかが手がかりとなりました。

これら「教勢調査」と「中央同朋会議」を経て、僧侶と

門徒が共に学び・共に場を創る「**共学共創**」。そして、地域におけるお寺の必要性を回復していくために「**出向く・原点を確かめる**」ことが、寺院活性化のキーワードとなりました。

このような経緯を経て、お寺の長所を活かした将来計画を僧侶と門徒が一緒に話し合いながら考えていく「**元気なお寺づくり講座**」が始動したのです。

「うちの寺なんか、特になんもないよ」。これは、「元気なお寺づくり講座」でよく聞かれる言葉です。しかし、フレームワーク(考え方)を整理して新たな視点、抜けている視点を見つづける仕組みを用いて進めていくにしたがって、さまざまなお寺の「**無形の価値**」が発見されていきます。それは、「あたりまえ」と思い、気にも留めなかったものや、まったく気づいていなかったものなど。

お寺の「**無形の価値**」に気づき出したら、そこからの展開は加速します。何をやるべきか↓その優先順位↓具体的手法や段取り↓年限が形になっていきます。さながら、その風景は、寺族と門徒によるお寺の棚おろしのようです。

③**使命**：お寺は、何を今の人々に提供しようとしているのか。何をもちって欠かせない存在であろうとするのか。

④**ビジョン**：お寺が願う目指すところは何か。

⑤**行動計画**：どのようにして「使命」や「ビジョン」を達成しようとするのか。

実際に①から進んでいくことによって、作業計画が具体化していきます。フレームワークは魔法の道具ではありません。あくまでも目前にあるものを捉え直す手助けをしてくれるものです。そのフレームに從って考え方や捉え方をお寺に関わる人々が協力して整理していく時、そのお寺の現状と歩き出す方向が明確になります。

地図を見るにしても、どこにいくかがわからなければ、実際に歩き出す方向がわからないように、まず大切なことは、現在の認識です。フレームはその手助けをしてくれます。

そして、今いる場所と願う姿が定まるならば、あらたな一歩は、いたずらに踏み出す一歩ではなく、確かな方向性を持った一歩になります。

一つひとつのお寺がその一歩を踏み出す時、宗門は大きな一歩を踏み出すこととなります。

# 活性化の要—活動の下支え—

種子を植えて作物を育てる。その際に重要なことは、土と気候です。土を丁寧に耕してその作物に適したものにし、気候を見て、種子を植える。この条件が揃う時に作物は成長します。

「寺院活性化支援」の取り組みでたとえると、

土壌はお寺そのもの。  
種子は事業。  
気候環境はお寺を取り巻く社会状況です。

寺はその地域の僧侶と門徒で構成され、「寄合談合」によって運営されてきました。つまり、僧侶と門徒で「そのお寺」らしさを発揮して現在まで歩んできたのです。

寺院活性化は、なにも新しいことをするわけではありません。お寺の規模の大小に関わらず、個々のお寺に必ずある、伝わってきた「**無形の価値(強み)**」を再発見し、時代の多様性に対応できるような磨き直しにつながります。すると、ピンチをチャンスに変えていく機会が増えます。

かつて「元気なお寺づくり講座」に参加した門徒が、活性化の意味するところをこう表現してくれました。「そりゃ簡単や。仏法を開く縁が広がっていくことやろ」と。またある門徒は、「住職・若さんが、私たちにお寺のことを相談してくれた。ありがたい」と。

人と人の間に仏法を受け取る場が生まれ出されている具体的な姿です。これが寺院の活性化なのです。

そして、「支援」とは、専門家が乗り込んで行って主導するものではありません。**主役はお寺**。お寺が主役ということは、そこに関わる一人ひとりが主役であることです。

そこで支援するとは、現場に赴き、作業(寺院の活動)のメニュー作りや活動の再構築に関わっていくことを通して、有縁の人々がイキイキと輝く舞台環境を整えるための、伴走です。

お寺には、仏法を元に、私たちの生き方を支えるたくさんの可能性があります。寺院活性化支援の取り組みはそれぞれを再発見していく一歩です。

# 仏法を聞く場の下支え

## 寺院活性化支援とは？

お寺は、親鸞聖人が頭かにされたお念仏の教えを聞く大切な場です。このたびの宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業の重点施策として、「1つの寺、1人の人を大切に」寺院活性化支援があります。この寺院活性化支援の取り組みの一つに、さまざまな地域での「元気なお寺づくり講座」の展開があります。本紙では、この講座でお伝えしている学びの内容についてご紹介します。



「どこにでも生える万能な種子はなげ、活性化とは、そのような種子をお寺に渡すことではありません。願った種子が芽吹くように、土壌を練り上げる作業に寺族と門徒が参画する。それがこそが、「寺院活性化支援」の眼目です。

お寺の環境や状況は千差万別で、活性化の在り方も多様にあります。今までお

寺はその地域の僧侶と門徒で構成され、「寄合談合」によって運営されてきました。つまり、僧侶と門徒で「そのお寺」らしさを発揮して現在まで歩んできたのです。

寺院活性化は、なにも新しいことをするわけではありません。お寺の規模の大小に関わらず、個々のお寺に必ずある、伝わってきた「**無形の価値(強み)**」を再発見し、時代の多様性に対応できるような磨き直しにつながります。すると、ピンチをチャンスに変えていく機会が増えます。

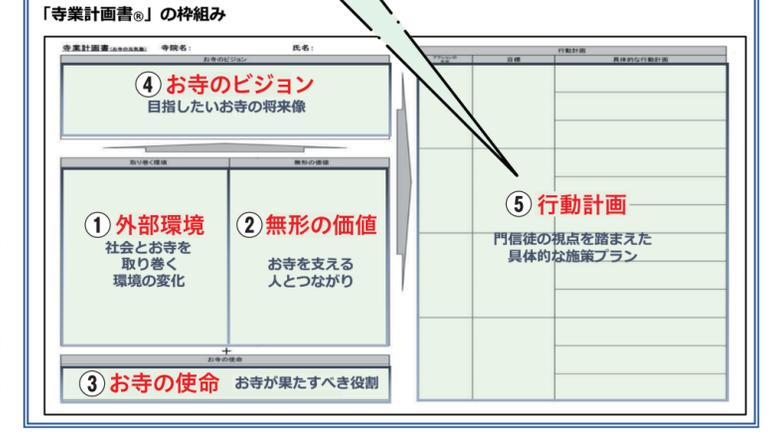
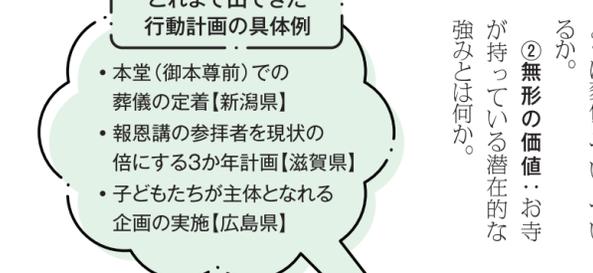
かつて「元気なお寺づくり講座」に参加した門徒が、活性化の意味するところをこう表現してくれました。「そりゃ簡単や。仏法を開く縁が広がっていくことやろ」と。またある門徒は、「住職・若さんが、私たちにお寺のことを相談してくれた。ありがたい」と。

人と人の間に仏法を受け取る場が生まれ出されている具体的な姿です。これが寺院の活性化なのです。

そして、「支援」とは、専門家が乗り込んで行って主導するものではありません。**主役はお寺**。お寺が主役ということは、そこに関わる一人ひとりが主役であることです。

そこで支援するとは、現場に赴き、作業(寺院の活動)のメニュー作りや活動の再構築に関わっていくことを通して、有縁の人々がイキイキと輝く舞台環境を整えるための、伴走です。

お寺には、仏法を元に、私たちの生き方を支えるたくさんの可能性があります。寺院活性化支援の取り組みはそれぞれを再発見していく一歩です。



フレームワークを用いた寺業計画書の雛型

## 元気なお寺づくり講座

全5回のフレームワークを通して、お寺の将来像へのロードマップとなる「寺業計画書」を完成させていく講座です。部分的に体験することもできます。

三条教区での元気なお寺づくり講座

## お寺に寄り添う講師派遣

多様なニーズに応じるために、お寺の現状と未来について丁寧な聞き取りを実施し、適した講師を派遣します。複数箇所での連続講座なども要望に応じて可能です。

岡崎教区安楽寺への講師派遣

## 子どもや若者との出あいの場づくり支援

青少年教化に関するお寺の悩みや状況の聞き取りから、子どもや若者との出あいの場づくりを青少年センターと連携して考えます。

山陽教区妙蓮寺での若者によるおみぎ

## 文書伝道マニュアルとセミナー

お寺から発信するあらゆる文書(掲示板や案内チラシ、寺報など)に関する作成マニュアルを元に、要望に応じて講師が出向して講座を開催します。完成まで丁寧にサポートします。

全寺院に配布しています

いずれの事業においても、きめ細やかな対応ができるように「現場に赴くこと」と「丁寧に傾聴すること」を大切にしています。ぜひとも実際に体験し、お寺の活動にお役立てください。

しんらん交流館ホームページ

「浄土真宗ドットインフォ」

しんらん交流館 内 真宗教化センター「寺院活性化支援室」  
TEL 075-371-9208  
Mail kikaku@higashihongani.or.jp